目次

○埃及を出る歌　其二
○嬰兒と眞乳
○勇ましい一騎打
○迷妄の工作
○誰でも
○ぼうやの神樣
○雪の色と罪の色
○ジャオゴーの話
○老婦人の祈禱
○聖書にある鳥の話
○舊約書名記憶唱歌

（三）

編輯に就て　御意見があるなら　聞せて下さい

俗語で載せた聖書の引照は　原意を完全に　現はしたとは云へぬ故　その積で讀で貰いたい

正誤　第一號『埃及を出る歌』の　十二節に『最後の罰は下りしが』とあるは『最後の罰は下りしか』の誤植ゆゑ　正誤す

本誌はなるたけ多數の人に　讀で貰いたいので代價は安くしてあるのですから　御存じの信者や福音を聞く方へ配與に　多數用ゐて下さい

初號は主の憐で　多數賣て　殘部僅少になつた故本號は多數印刷しました　多數注文して下さい

第二號

埃及を出る歌　其二

十七　ナビブの月の十四日　四百餘年の昔

雲のはしらに火のはしら
曠野のかたにむかひつゝ

撰民エジプトをいでたちぬ
釋かれし今日のうれしさよ
（出埃及記十二〇四十、四十一、十三〇四）

十八　はなちし撰民をとらへんと
つはものあまたひきつれて

ひるよる撰民をみちびけり
カナンの國をのぞみつゝ
（十二〇二十——二十二）

ふたゝびパロはかたくなに
はげしく後を追ひきたる
（十四〇五——九）

十九　まへはみなぎる紅海よ
不信の撰民はれどろきて

二十　れうるゝなかれ今日エホバ
さとすモーセのいふごとく

廿一　つよく吹きくるひがしかぜ
水はわかれてみぎひだり

廿二　エホバの撰民はやすらかに
つゞいて來たる敵の軍

廿三　きけいさましき凱歌は
神の御名をば頌むるなり

廿四　此の權能ありめぐみある
なにをかうれひおそれなん

廿五　こゑたからかにうたひつゝ
われらの神にめぐみあり

二

うしろは猛烈き軍勢よ
神とモーセにつぶやきぬ
（十四〇十——十二）

すくひたまふがしづまれと
かみのみちからあらはれき
（十四〇十三——二十）

海しりぞきて陸となり
道のかきとぞなりにける
（十四〇二十一）

乾けるみちをわたりゆく
さかまくなみに溺れけり
（十四〇二十二——三十一）

すくひを視たるイスラエル
うのみほまれをうたふなり
（十五〇一——二十一）

神はわれらの主にませば
いかなる敵がよせくるも
（羅八〇三十一、三十二、來十三〇六）

信じて曠野をたびせばや
御手のちからもかぎりなし
（詩六十二〇十一、十二）

○嬰兒と眞乳

諸子は　生れたばかりの　嬰兒を　たび〳〵　見たでせう　生れたばかりの　嬰兒は
少しも　理屈を　知りませんが　腹が空けば　オギャー　オギャー　と泣いて　乳を
欲しがり　乳を飲んで　だん〳〵　成長ます　我等も　生れたばかりの　嬰兒の如く

三

單純に　神さまの下さる　眞乳を　慕へば福です　ペテロ前書　二章二節に　『今生れし嬰兒の　乳を慕ふ如く　爾曹　心を養ふ眞乳を　慕ふべし』と　勸められてあります　此の眞乳は　神さまの言です　然るに　人間は誰しも　威張たいから　『今生れし嬰兒』などゝ　云はれることを　好きません　また　神さまの言を　聖靈の　教へ給ふまゝに　受入ません　コリント前書　二章十四節に　『性來の　まゝなる人は　神の靈の情を受ず　是　かれには　愚なる者と　見ればなり』と　あるやうに　人間の性來は　神さまの言を　りのまゝ　受入ないで　何か　人間の理屈を　附加へたり　これを批評したり　する事を　大人らしい事　と考へ　終には　神さまの御言を輕んじて　人間の理屈の方を　重んずるやうに　なります　諸子は　『今生れし嬰兒』と云はれるのは　嫌ですか　それとも　生れたばかりの　嬰兒のやうに　神さまの言をお慕ひなさるか

予は　たび〳〵　十歳前後の　子供衆が　人情小說や　新聞の繪入續物を　讀でをるのを　見ました　其の子供衆は　人情小說などが　どれほど　毒物であるか　知らぬゆゑ　讀むのでせうが　諸子よ　あの類の書物は　靈の糧にならないで　却て　毒になります　然し　神さまの言は　靈の糧であります　イザヤ書　五十五章　第一節に　『噫なんぢら　渴ける者　こと〳〵く　水にきたれ　金なき者もきたるべし　汝等きたりてかひ　求てくらへ　きたれ　金なく價なくして　葡萄酒と　乳とをかへ』　とあります　何とありがたい　御招待では　ありませぬか、まだキリストを信ぜぬ　渴ける者は　はやくキリストを　信じなさい　彼は『活水を　爾に予ふべし』（約四〇十）と　仰せ給ひました　此節に　『葡萄酒と　乳とをかへ』とあるのは　人造の酒と　牛乳でも飲め　と申す譯では　ありません　葡萄酒は　神さまの下さる歡喜　乳は神さまの　下さる糧を　意味します　りれで　神さまの賜は『金なく價なくして』頂けます　此の福な御招待を　受入ない人に　神さまは　『なにゆゑ　糧にもあらぬ者のために　金をいだし　飽ことを得ざる　ものゝために　勞するや　われに聽從がへ　さらばなんぢら　美物をくらふをえ　脂をもて　りの靈魂を　たのしまするを得ん　耳をかたぶけ　我にきたりてきけ　汝等のたましひは　活べし』（イザヤ書五十五〇

二、三）と宣ひます　まことに　『糧にもあらぬ』贅澤品や　心の毒になる　小説本などを　買ふには　『金』が入用で　從つて　『勞』がいります　然し神さまは　『金なく價なくして』『活水』を　たまひ　またつねに　眞の糧や　慰藉や歡喜を　賜ひます

斯く神さまが　無代で『美物』を　下さるのに　諸子は　金を出して　毒物を買ひたいですか　或る人は『神さまの言は　面白くない　小説は面白いから　讀むのだ』と云ふかも　知れませんが　それは　神さまを識らぬ人や　聖書をあまり　讀まぬ方の云ふ言で　我等は　彼等の　眞似をする　必要はありません。

靈魂の糧なる　神さまの言を　無味ものと思ふは　誤認です　神さまの子供には　これほど　おいしいものは　ありません　詩篇百十九篇　百三節に　『みことばの　滋味は　わが脣にあまきこと　いかばかりぞや　蜜のわが口に　甘きにまされり』と　錄されてあります　諸子は　このおいしい　養ひになる　神さまの言より　蜜の入つた菓子の方が　好きですか

五六歳にもなれば　れ母樣の膝に　抱かれて　乳を飲むのは　恥かしい事ですが　神さまの下さる　眞乳を飲むのは　幾歳になつても　決して　恥かしい事では　ありません　我等が單純に　神さまの言を　慕ふのを見て　世の人は　嘲笑ふでせうが　うんな事には　頓着なしに　遠慮をせずと　『今生れし　嬰兒』のやうに　神さまの言をめしあがれ

○勇ましい一騎打

是れは　サムエル前書　十七章より拔いて　わかり易いやうに　書いたのである。

ペリシテ人は　神の人民イスラエルを　苦めやうとする　者どもである。彼等或る時軍隊を集めて　攻めて來たので　イスラエル王サウロも　其の軍隊を集めて　對陣に及んだ。所で　ペリシテの軍隊から　ゴリアテといふ　非常の人物が立現れた。其の身長は　一丈一尺ばかり　首には　銅の冑をいたぶき　身には　鱗とちの鎧を着てゐる。其の鎧の重さは　二十一貫目あまりで　彼が鎗といふものは　其の鋒の鐵ばかり

で　二貫六百目もあるのである。それで此のゴリアテが　大音聲に呼はつた

『其方どもは何で　行列を立て〳〵　出て來るのぢや。何もそんなに　多勢と多勢で戰をせんでも　よからう。我樣はペリシテ人で　其方どもは　サウロの家來ぢや。ぢやに由て　何人か一人をよりぬいて　我樣の處によこせ。我樣と其者と　勝負をして　其者が勝つて　我樣を殺したなら　ペリシテ人は皆　其方どもに　降參して家來になる　又我樣が勝つて　其者を殺したなら　其方どもが　我たちの家來になれ。ヤー　何人でも出て來い。我樣は今日　イスラエルの軍隊どもを挑むのぢや。出てこい出てこい』

人二たり前も　せいの高さがある　こんな奴に　怒鳴りちらされて　たまるものではない　イスラエルの方では　王樣はじめ皆々　吃驚仰天して　怖ろしがるばかりである。が　何故うんなに　怖がるのであらうか　自分どもが　活ける神の人民であるのに。敵が何ほど強い　敵であつても　神樣が　我と偕にいます以上は　何も恐るゝに及ばぬ　次第ではないか。彼等は實際に　神を忘れてをるから　怖い物を見て　怖へ

なるのである。

エサイの末子のダビデは　親の所で　羊を牧ふてをる。其の三人の兄は　軍に出てをる。うれでダビデは　親の差圖で　兄さん達の安否を　問ひに往つた。例のゴリアテは四十日の間　朝夕出かけて　來たのであるが　此の日もノソリ〳〵と　出かけて來て怒鳴つた。で　人々は大さうおそれて　逃げはなれたが　ダビデはこれを聞いて

『此奴割禮のない　ペリシテ人のくせに　活ける神の軍に向つて　戰をしかけるとは　不埒千萬な奴ぢや』

といふて　其處にをる人と　話してをるので　遂にサウロ王が　其れを聞いて　ダビデを召した　召されてダビデは　サウロに申上げた。

『皆々が　氣を落してはなりません。臣がまゐりまして　彼奴と　戰かひまするでござりませう』

王『イヤ　汝は　あのペリシテ人と　一騎打を　することはできん。汝は少年ぢや。あの奴は　若い時分から　鍛ひにきたふた　軍人ぢや』

ダビデ『去る頃　臣が　父の羊を　牧ふてをりまするとき　一疋の獅子と　一疋の熊と
がまゐりまして　羔を取りましたので　其の後を　おふてまゐりまして　打ちたた
きまして　羔を其の口から　援け出しました。さう致しますると　其の獣が臣に猛
りかゝりましたから　其の鬚を　引捕へまして　擊ち殺しました。其のとほりに獅
子と熊とを　殺しましたので　今此の割禮のない　ペリシテ人めが　活ける神の軍
に向つて　戰をしかけまするから　此奴をも　かの獣と同し目に　逢せてやります
る。……ヱホバは獅子の爪と　熊の爪とより　臣を援ひいだしたまふたので　ござ
りまするから　此のペリシテの人よりも　援ひ出して　下さることは　必定でござ
りまする』

此の年若い牧羊者は　何と勇ましい　人ではないか。さかし　彼は決して　譯のわか
らぬ　猪武者ではない。彼の憤つたのは　ヱホバの御名が　汚されたからである。彼
の勇んだのは　ヱホバが必ず助けて　下さるといふことを　信ずるからである。ダビ
デは信仰の眼を　見ひらいて　神樣を眺めた。うれで勇ましいのである。

王『それでは　往くがよい。願くば　ヱホバ　汝とともにいませ』
王は自分の武具を　ダビデに着せた。銅の冑を　首にかむらせ　鱗とぢの鎧を　身に
着せた。王の甲冑を　賜はつたのであるから　殊の外　名譽の次第である　並居る群
臣が　さぞ　うらやましく　思ふたであらう。が　ダビデは未だ　甲冑を着たことが
ない　ためしたことがないから　劔を佩びて往けるか　往けぬか　試みて見た。うう
して　サウロに申上げた。

『臣は未だ　ためしたことが　ございませんので　これを着ては　まゐることがで
きません』

甲冑を脱ぎすてゝ　手に杖を持つて　光滑な石を　五つ拾ふて　其れを自分の　牧
羊者の嚢の中に入れて　手に投石索を持つて　敵に立向ふた。如何にもさうであらう
不信仰なサウロの　武具は　見た所が何ほど　立派であらうとも　ダビデには入用が
ない。のみか　反つて邪魔になる　ばかりである。ダビデの武具は　信仰といふ　武
具である。神樣を信ずる　神樣に依頼む　是れが　ダビデの武具である。

二十一貫の鎧を着て　鋒が三貫近くある　鎗を持つてをる　一丈何尺の大勇士に年若な牧羊者が　其の身其のまゝで　立向ふのであるから　見た所では　とても勝てる見込はない。大男ゴリアテは　ダビデの出て來るのを見て　近よつて來た。見廻してダビデを見るといふと　年の若い　ホンノリと赤い　美しい人であるので　果してこれを馬鹿にした。うれは　ダビデと偕に　神様の居るのが　見ぬゆゑである。

ゴリアテ『其方は　杖を持て出て來たな。我様を　犬と思ふてをるのか』

と曰ふて。自分の神々の名で以て　ダビデを詛ふた。彼は自分が　強いばかりではない。何かヤハリ　神々を信仰する者であつた。しかし　彼の神々は決して　彼を救ふことも　ダビデを罰することもできぬ　ダビデの神は　眞の神でいますが　彼の神々は　空想の神々であるから　救ふことも　罰することも　できんのである。が　ゴリアテは　飽まで力身で　ダビデに曰ふた。

『我様の處に來い。其方の肉を　空の鳥と野の獸の　餌にしてやるぞ』

ダビデ『其方は　劔と鎗と矛とを持て　拙者に立向ふて來るが　拙者は　萬軍のエホバの御名で　其方に立向ふのぢや。其方が挑んだ　イスラエルの軍の　神の御名で立向ふのぢや。エホバは今日　其方を拙者の手に　付して下さる。拙者は　其方を擊ち倒して　其方の首級を　斬つてやる。うして　ペリシテ人の　軍勢の死骸を今日　空の鳥と地の獸とに呉れて　イスラエルに　神があるといふことを　世界中の者に　知らせてやる。うれで　此の群衆がみな　エホバは人を救ふのに　劔や鎗を　用ゐたまはぬといふことを　合點するであらう。戰はエホバに　よるのぢやで　エホバは其方どもを　われ〳〵の手に　付して下さるのぢや』

ゴリアテは立ちあがつて　ダビデに向ひ　ダビデは　彼の方へと　馳せ向ふた。そうして　ダビデは　嚢の中に手を入れて　石を一つ取つて　ピューッと投げて　ゴリアテの額を打た。其石が　見事　額に突き入つて　大男は俯伏しに　ドーとたふれた。が　ダビデは　劔を持つてをらぬから　ゴリアテの上にのつて　其の劔を取つて　其れを拔いて　これで彼を刺しころして　其の首級を斬つた。賴み切つてゐる　勇士が殺されたのを見て　ペリシテ人は　逃げ出したので　イスラエルは鯨波をあげて　追

ひかけて　大勝利を得た。

○『迷妄の工作』

今日　西洋にも　東洋にも　人間に　祀られてをる　諸神の數は　實に　數へ盡すことが　できません　それらの諸神は　いづれも　眞の神で　ありませうか　天地はそれらの　諸神に　造られたので　ありませうか、イーエ　それらの偶像は　『天と地と海および　其中の萬物を　造り給へる活神』（徒十四〇十五）ではありません　今日こう世の人は　活る眞の神さまを　識らないで　偶像に事へて　をりますが　未來にそれらの　『天地を　造らざりし　諸神は　地の上より　この天の下より　失さらん』（エレミヤ十〇十一）時が　まゐります　元來　人間が　眞の神さまを　識らぬために　迷ふて　澤山の諸神を　造り始めたので　ございます　然し　それらの偶像は　僞神さまですから　其の中に　靈のあるはづが　ありません　聖書に　『其鑄るところの像は　僞の者にして　その中に靈なし　其等は　空しき者にして　迷忘の工作なり』（エレミヤ五十一〇十七、十八）と　錄されてございます　木や石に向て　合掌し　死人を祀りて拜みなどするは　迷妄でなくて　何でせう　舊約聖書　哈巴谷書第二章　十八節と十九節の　聖言を　お讀みなさい　『雕像は　その作者　これを刻みたりとて　何の益あらんや　又鑄像　および僞師は　語はぬ偶像なれば　その像の作者　これを作りて頼むとも　何の益あらんや　木にむかひて　興ませと言ひ　語はぬ石に　むかひて起たまへと　言ふ者は　禍なるかな　是　あに　教誨を爲んや　視よ　是は　金銀を着せたる者にて　その中には　全く氣息なし』

予も　往時は『迷妄の工作』なる　偶像を　拜んでをつた者で　ございますが　恩惠に富み給ふ　眞の神樣は　御子　キリストイエスに頼て　予のやうな惡者を　召し給ひ　『偶像をすて　神に歸して　活る眞神に　事へ』（テサロニケ前一〇九）奉るやうにして下さいました　此のキリストイエスは　『罪人を救んために　世に臨』（テモテ前一〇十五）り給ひし御方で　我等を救ふためには　御命をさへ　惜みたまはず　終に十字架に懸り　汎く世の人の爲　特別　信ずる者の　身代となつて　死給ふたのです　うし

て　毎度申すやうに　死でから第三日に　墓より　活復りたまひ　今は　神様の右手に坐つて　居給ひます　われで　今日は　誰でも　此の御方を　信じさへすれば諸の罪が赦され　救はれて　神様の御前に　義とせられます（羅三〇廿二より廿四）今日なほ『迷妄の工作』なる　『天地を造らざりし諸神』　即ち『僞の者』を　拜んでをる御方は　一刻も早く　キリストを信じ　偶像をすて〻　活る眞の神様を　拜む者となりなされませ　聖書の言を　一つ讀みませう　『蓋もし　爾口にて　主イエスを認はし　又　なんぢ心にて　神の彼を　死より甦らしゝを　信ぜば救るべし　われ人は心に信じて　義とせられ　口に認はして　救るゝなり』（羅十〇九、十）

○誰でも

皆さん　約翰傳　三章十六節を　繙いて下さい　われに神は　われの生たまへる　獨子を　賜ほどに　世の人を　愛し給へり　此は凡て　彼を信ずる者に　亡ると無して　永生を　受しめんが　爲なり』と　書いてあります　この節の　中頃にあ

る〻『凡て』といふ字は『誰でも』と　いふ意味なのです　かりに『凡て』を『誰でも』と　取かへて見ると　誰でも　彼即ちキリストを　信ずる者は　亡ること無して　永生を受くることが　できると　いふ事になつて　意味が　至極判然します　われに付て　一の實話が　ありますから　チョット　話しませう　細いことは　さて置き　ある所に　年老いた　婦人があつて　大病に罹り　今にも死にさうな　危い有樣です　その枕元にて　小き娘が　聖書を　讀みきかせ　居りました　約翰傳　三章を　だん〳〵讀んで　十六節に來ると　『凡て』といふ語が　老婦の耳に　とまつたので　老婦は急に　小娘をとゞめ　『ヲヤ　『凡て』とは　どういふ　意味だね』と尋ねると　小娘は『私は存じません』と　答へました　すると　老婦は『りんなら　すぐに往て　誰樣にでも　聞いておいで』と　言付ましたので　小娘は　聖書を　うこに置いて　飛出しました　うこへ丁度　通りかゝる人が　あるゆゑ　小娘は　其の人を　呼留めて　『お願ひで　ございますが　『凡て』と　いふ字の意味を　聞かせて下さい』と　尋ねますと　その人は『さうかい　われは『誰でも』と　いふ事だよ』と

敬へてくれました

小娘は　此の答を聞いて　禮を述べ　大急ぎで　かけもどり　病人の枕邊へ　よるか早いか　氣の毒な婦人は　堅く閉ぢた　眼を開いて　『オー　モー　分つたかい』と　きゝましたから『ハイ　或人に　逢て聞きましたら『誰でも』と　いふことだと　申されました』と　小娘が答へると　老婦は　やせた手を合せ　天をあふいで『難有い　難有い　うれなら　私は活られる　いつまでも　活られる』と　いひも果ず　眼に就きました

此の老婦人は『誰でも』といへば　自分も　含んで居ると分り　何の疑もなく　安心と喜樂とを以て　その信仰の　目的なる　主の御許へ　ゆきました　是は實際に　あつた話ですが　皆さんも　此の婦人のやうに、『誰でも』のうちに　自分も含んで　をると分れば　安心ができませう　しかし　思ひ違へて　ござる方も　隨分あるでせうから　いま　此の節を　二つに分けて　話しませう

神樣の側　『うれ神は　うの生たまへる　獨子を　賜ほどに　世の人を　愛し給へり

汝の側　『此は凡て(誰でも)　彼を　信ずる者に　亡ること無して　永生を受しめんが　爲なり』

となります　神樣の側は　賜ふ事　愛する事で　汝の側は　信ずる事　受ることです

ところが　自分の側を　間違へて　神樣の側を　守らうと　骨折てをる人があります

神樣を　一生懸命に　愛し　神樣に　熱心に事へれば　神樣が　自分の熱心を　信用し　自分の善い事を　受けて下さつて　其の報酬として　永生を　賜はるであらうと考へてをるのは　大間違です　汝は　汝の側を　守らなければ　駄目です　神さまが汝を愛し　汝に　御獨子を賜ふた　是は　神樣の側です　汝は　神樣の御獨子を　心から信ずれば　うれで　價なく　骨折なく　たゞで　永生をいま　此の世界に　居る時から　頂戴することが　できて　決して　亡ぶることが　ありません　『子を信ずる者は　窮なき生命を　え(有つ)』と　約翰傳　三章三十六節に　あります　皆さん汝の側が　分りましたか　汝も『誰でも』のうちに　ふくんでゐますよ

○ぼうやの神様

(一)
半鐘ジャン〳〵
ソレ火事よ
近所はビックリ
れほさわぎ
ぼうやはあはてぬ
いのりする
イエス様御ぐんじ
大丈夫

(二)
地震がおもはず
はじまれば
はだしでにげだす
ひともある
ぼうやはうんなに
こはがらぬ
地震のするのは
神のわざ

(三)
ぼうやのかみさま
いきたかみ
てんからなんでも
みてござる
くーらいところも
こはくない
かみさまぼうやを
みてござる

○雪の色と罪の色

今は冬ですから雪を見る機會が度々あります　雪の色は申すまでもなく白いので雪が降れば野も山も家も木も眞白になつてしまひます　さて罪の色は何でせうか『罪に色なんてあるものか』と れ答へなさるかも知れないが聖書に罪の色を假定に赤としてあります　赤色は潔白の反對です

嬢達に れ尋ねしませう　若し汝の顏に赤い繪具が附着たら如何なさいます『石鹸で洗ひますわ』と　御返事ですか　よろしい　うんなら汝の潔白な衣服に附着たら如何なさる『灰汁とソーダで洗ひますわ』と　れ答へですか　成程合理です　赤い汚點の附着た顏や衣服を洗つて白くするのは左程困難ではありますまい　しかし尙一問　れ尋ねしたい　汝の罪は何でれ洗ひなさるか　これも灰汁やソーダですか　なか〳〵　さうはできません『緋のごとく』赤い汝の罪は灰汁やソーダでは洗滌すことができません　論より證據　聖書に『たとひ嚇吶をもて自ら濯ひまたおほくの灰汁を加ふるも汝の惡はわが前に汚れなりと主エホバいひ給ふ』(エレミヤ二〇二十二)と　錄されてあります　緋のやうに眞赤な罪をすつかり潔めて雪のやうにする事のできるのはたど

キリストの御血の外ありません　キリストが　十字架の上で　流し給ふた　御血は　實に類なき　貴いもので　信ずる者の罪を　殘らず洗ひ落して　全く潔めて　下さいます　聖書に　『其子（神の御子）イエスキリストの血　すべて罪より　我儕を　潔む』（約翰書一〇七）『なんぢらの罪は　緋のごとくなるも　雪のごとく白くなり　紅のごとく赤くとも　羊の毛のごとくにならん』（賽一〇十八）と　ある通り　キリストの御血に　潔められた者は　雪のごとく　白くせられたので　ありまして　モハヤ　少しの赤い汚點も　ないのです　なんとありがたいでは　ありませんか　汝は　モー　キリストを信じて　雪のやうに　潔められた　信者ですか　うれとも　未だ　眞赤に汚れてをる不信者ですか　如何程　顏容が雪白で　衣服が潔淨でも　キリストを　信じないなら神さまの御前には　不潔のです　箴言三十一章　三十節に　『艶麗はいつはりなり美色は呼吸のごとし　惟　エホバを畏るゝ女は　譽られん』と　錄されてあります

○ジャオゴーの話

スマツラといふ島で　或日　ジャオゴーといふ　八歳位の幼兒が　濱邊を歩いてをつた。スルト　二箇の人が　小舟を　其の傍に漕ぎつけて　親切な口調で　ジャオゴーに　何を爲てをるのか　尋ねた。幼兒は何心もなく　『父樣を待つて　をるのです』と答へた。『さうか　父樣かへ　汝の父樣は遙か　彼方で　仕事を爲てをる。さあ　此の舟に乘れ　父樣の所へ　携れて往つてやるから』と　曰はれたので　ジャオゴーは其の氣になつて。小舟に乘つた。が　父樣の所へ　携れて　往かるゝところか　丸で反對の方へと　携れ往かれた。彼は憫然に　人盜に　盜まれたのである。程なく　其の實を悟つた時には　ジャオゴーの悲嘆と苦痛とは　勿論　話しやうも例へやうも　ないほどであつたであらう。幼兒諸君よ　諸君はいつも　愛情暖かな　父母の膝下に養はれて　未だ斯る悲しき目に　出逢ふたことはあるまい。うれは全く　神樣の御守りに由る次第であるから　常に神樣に　御禮を申上ねばなりません。さて　此の憫然な幼兒は　如何なつたであらう。彼が斯くの通り　盜み去られて　生涯うの父母に　會ふことができなかつたのは　此上もない　不幸であるが　彼は之に由て　却て天の父樣

を知る者となつた。是は又た此の上もない幸福である。人間は其の業慾に由て無慈悲に彼を盗んだが神様は彼を愛したまふがゆゑに却て之を以て此の幼兒を永遠に救ふの機となしたまふたのである。ジャオゴーが若しも安全に父母の家に居つたならば救主イエスの事を聞くことはできなかつたのであらう。

諸君よ今も人間は矢張り無慈悲な者であるから我等をひどい目にあはせることがあるかも知れぬが神様は慈悲深い御方でいつも我等を愛してござるのである でれを思ふて心大丈夫に勇み喜んでをることが福ひである。

ジャオゴーは其れから其れへと段々高い價で賣られてをつたが遂に傳道に來てをるアッセレットといふ人が憫然に思ふて九十圓ばかり拂ふて此の兒を贖ふた。ジャオゴーが忠義に傳道者に事へ又た聖書の眞理にもよく耳を傾け何處へでも私伴をして往き荷物の世話や食物の世話をやいたりするので傳道者は益々彼を愛し何かして もつと良い教育を受けさせたいものだと思ふて遂に遙るゝ〳〵と歐羅巴に送つて ジャオゴーは和蘭國のメヤーといふ人の家に養はるゝことゝなつた。

ジャオゴーはメヤーの家で親切な取扱ひを受けた。印度の衣服を脱がせられて洋服を着せられ家族と偕に同じテーブルで食するし。讀書だの算術だの音樂だの いろ〳〵の教育を受た。そうして彼は怜悧な子であるゆゑ大に進歩して和蘭語の讀み書きも段々覺にて談話も大分できるやうになつて來た。ところで聖書の話は勿論いつも聞かせられたのであるが悲いことには彼は容易に救主を信じなかつた。東洋に居る時分アッセレットから神が世界を造りたまふたことを聞いても此の兒の心では萬物は自然に出來たものであると思ふてをる。和蘭に來てメヤーから主イエスの事天の事地獄の事など聞せられたが彼はいつでもさういふ者はないと言ひ張つてをるがメヤーの家に來てから三ヶ月の後に一つの事件が起つて主は之をば此の兒の永遠の福ひの爲に用ゐたまふた。まことに神の恩は感謝の外はない。

或晩座敷の中央に机があつてジャオゴーは此の机を後ろにして坐つてをり

机の上に　錢箱があつた。下婢が座敷に　這入つて來て、錢箱に眼が着いて、何人も見てをるまい　と思ふて　少し盗んだ。所で　ジャオゴーは　直ぐに　立ちあがつて其れをとがめて　旦那に言ふぞ　といふておどしつけた。下婢は大閉口で　はじめは樣々になだめて　言付けないやうに　しやうとしても　一向聞かないから　遂には腹を立てゝ　盗まぬと言ひはつて　此の兒を　打ちたゝかふとした。老婆樣が　其れを聞付けて來て　下婢をば臺所にやり　ジャオゴーには　自分の部家に歸つて　主イエスに　祈禱をせよと　申付けた。所で　間もなく　彼は　寢衣のまゝで　家族の部家に　入り來たつたので　老婆が『ジャオゴー　何したの　まだ汝は寢ないのか』と尋ぬると　ジャオゴーは『まだです　予は　あの事を　メヤーさんに　御話しせねばなりません　明朝になれば　ジャオゴーが　死ぬるかも知れません。ジャオゴーはうれを見ました。主イエスも　其れを見なさいました。』と答へた。其れから　彼は家中の者を　呼び集めて　錢箱と　自分の財布とを　机の上において　一同の前で　かの下婢に向つて　彼女が　此の箱と　財布との中から　盗んだにちがひない　といふことを證をして　其れから　寢部屋に歸つた。で　此の事は　人間の耳に聞こえ　目で見えた事であるが　人が　見聞することのできぬ　心の中で　此の兒が　何いふことを思ふたか　うれは　主のみ　御存じの事である。ジャオゴーは　自分で　思ふた。『かの下婢が　我の前にあつたやうに　我は　主イエスの前に　あるのである。下婢は　何人も見てをらぬと　思ふたが　我が見てをつた。我は　主イエスが無いと思ひ主イエスは見てをらぬ　と思ふてをるが　主イエスは　有るのである。主イエスは見てをるのである。』此の時からして　此の兒は　主の話を悉く信じ　主の言に從ふて子供らしい單純と　喜とで　日を送るやうになつた。

（まだある）

○老婦人の祈禱

或所に　神樣を敬ふ　老婦人があつた　貧乏であつたらしいが　聖書にある　老女アシナのやうに（路二〇三十六、三十七、）始終　祈禱をつとめて　居つた　すると　或人が何かして　此老婦人の祈禱を　邪魔してやらう　と思つて『おばあさん　今日一日だ

け　一度も　祈禱をしなければ　銀貨を二圓　やるがなあ』と云ふた　老婦人は　いと眞面目な　おちついた容貌で　言しづかに『どう致して　天下の寶を　みな下さるとも　うんな御約束は　できません　サー　これから　早速　主に祈りませう汝の爲にさ　ね　汝が　主を信ずるやうにと……いまに　汝も　他人の祈禱を　止めるところか　私のやうに　喜んで祈るやうに　なりませう』と答へた

我等も　此の老婦人のやうに　始終　祈禱をすれば　福である　友達に　輕蔑されても　他人に　嘲笑はれても　かまふことはない　却て　うの人々のため　主に求むればよい　偶像は　大きい耳があつても　聞えないが　主は　活ける御方で　我等の祈禱に　耳を傾けてござる（彼前三〇十二）　帖撒羅尼迦前書　五章十七、十八節に『斷ず祈るべし……是れ　イエスキリストに由て　爾曹に要め給ふ　神の旨なり』とあるやうに祈禱は　神樣が　我等に　要め給ふ事であるとは　難有い　次第ではないか（約壹書五〇十四、十五、西四〇二、弗六〇十八、等を參照せよ）

○聖書にある鳥の話

（三）わし

『鵰の　うの巣雛を喚起し　うの子の上に　翱翔ごとく　エホバその羽を展て　彼らを載せ　うの翼をもて　これを負たまへり』とは　申命記三十二章十一節の聖言です　さて　諸子が　未だ上手に歩けない時に　母樣が　汝の手を引て歩かして呉た事を　モー忘れましたか　丁度うの如に　雛鵰も最初は　獨りで飛ぶ事ができない　そこで　親鵰が　巣雛をつれだして　空中に放つと　サー大變　今まで巣の中に　安息をして居つた雛は　小な羽をひろげ　風を切て　飛ばなければならぬ一生縣命骨打るが　だん〳〵疲勞て　終には　地上に落ちかゝる　すると　うの子の上に　翱翔りながら　雛鵰の樣子如何にと　見て居つた親鵰は　スーッと　大な翼をのし　落ちかゝる雛鵰の下に　身を入れて　強い翼の上に　弱い巣雛を　載せてやる　これが『鵰の　その巣雛を　喚起す』仕方である

我等が　此の世に居る間は　なか〳〵　安息ができぬ（たとへ　心の平安は　有て居

ても）我等はまだ　年が若いが　若ければ若いだけの　困難は　如何しても免れない
病氣に罹つたり、不信者に苦められたり　物品を奪られたり　貧しくなつたり　其の
他　種々な事情に　遭遇ふが　何故　神に愛せらるゝ信者が　斯樣な事情に　遭遇ふ
のであらうか　諸子よ記憶して下さい　神樣は　決して　無益に我等を　苦しめる御
方でない『鵰のうの巣雛を　喚起す』やうに　神樣は　我等を喚起して　種々な事情
に遭遇ふことを　許したまひ　我等をして　ヨブが『我はわが巣に死ん』（約百記二十九
〇十八）　といひしやうな　此の世に土着する魂生を　起さぬやうにさせ　此の世に安
息のおい事と　神樣にのみ依頼む事の　幸福を　學ばしめて　くださるのである　う
して　親鵰が　うの羽を展て巣雛を載せ　うの翼をもて　これを負ふごとくに　父な
る神樣は　我等を　種々な事情の中に　支へ助けて　主イエスキリストによりて『す
べて此等の事に　勝得』さして　下さる（羅八〇三十七）　玄かるに　神の子供等が　曠野
の旅路で　種々な困難に　遭遇ふのあまり　神の恩寵も　主の愛も忘れて　呟くこと
が　度々ある　實に　自分も　その一人であるが　これは　申譯のない極である　以

賽亞四十章　三十一節に『然はあれど　エホバを俟望むものは　新なる　力をえん
また　鷲のごとく　翼をはりて　のぼらん　走れども　つかれず　歩めども　倦ざる
べし』と　あるやうに　如何な　事情の中にも　呟かず　一切　神樣に　依頼む者は
『新なる力』を　頂戴し　荒き風を　物ともせず　天の方に向て　飛ぶ事ができる

○舊約書名記憶唱歌

集會で　舊約書の引照が　ある時分に　うの書が　聖書の　那邊にあるか　わ
からぬため　時間を　徒に費す御方を　往々　見受ますが　試に　此の唱歌を
謠ひなれて　御覽なさい　自然　舊約聖書の　書名や　順序などに　熟通てま
ぬるゆゑ　易く　聖書を　披き得るやうに　なります

一　開闢告ぐる創世記　　第二の書は埃及記
つゞくは利未記民數紀　　申命記にも律法あり
二　約書亞につゞく士師記には　　さばきづかさの歴史あり

三　路得記の記事のうるはしく
　　列王紀略と歴代志
　　ユダ イスラエル 歴朝の
四　ヨホバのたみの復歸をば
　　つぶ〳〵以士帖約百記にも
五　詩篇あはせて百五十
　　以賽亞につぶく耶利米亞の
六　つぶく預言書以西結
　　亞歴士阿巴底亞約拿に米迦
七　拿翁哈巴谷西番雅書
　　馬拉基の書ゞ舊約書

　　ダビデをしるす撒母耳書
　　上下四卷に別たれて
　　事蹟つばらに語るなり
　　しるすは以士喇尼希米亞書
　　神の教訓は充てるなり
　　箴言傳道雅歌の篇
　　預言に次ぐは哀歌なり
　　但以理何西阿また約耳
　　預言の書はなほもあり
　　哈基撒加利亞いまひとつ
　　三十九卷の最後なる

明治三十五年二月廿二日 印刷
仝　年仝月廿五日 發行

東京市日本橋區鐵炮町八番地
編輯兼發行人　淺田洋次郎
東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　東京印刷株式會社　天野勝彦
東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社
東京市日本橋區鐵炮町八番地
淺田洋次郎

發行所

雜誌の代金は　現金　又は　郵便爲替で　御送り下さい　不便な土地では　郵便切手でもよろし

定價　一部に付　金二錢
郵稅　三部まで　金二錢

221
136

020290-000-7

特15-754

をさなご　第2号

浅田　洋次郎／編

M35

ABI-0096